

# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314



一年間を通しておちばを賑やかにしよう

1. 毎月一千人のおちばがえり
1. 五十万軒にをいがけとおさづけの取次

立教 169年  
5月号

## 第88回

## 婦人会総会

## 婦人会総会に思う

本年は総会前日十八日十七時から十八時「御存命の教祖」と題して記念講演が開催されました。第2食堂・第3食堂・東講堂・東右一棟4階といずれの会場も超満員のご守護頂きました。

十九日総会当日は午前八時より受付九時三十分本部中庭におきまして第八十八回婦人会総会が開催されました。時間を追う毎に好天に恵まれ最前には真紅の各支部旗がまぶしく力強く揺れて、ふと群衆の中にあつて私の心の中はこの場所に毎年参加出来ることの喜びを無性に嬉しく感じさせて頂きました。

前方には婦人会の終生変わることもない成人目標である「ひながたをたどり陽気ぐらしの台となりましょう」のスローガンが大きく掲げられ真柱様・婦人会長様からは、ねぎらいと励ましのお言葉と共にみちの台としての成人をねんごろにおさとし頂きました。

式次第終了後、全委員長は、所属・氏名入り

のワッペンを左肩に貼り南礼拝場を除く三礼拝場に昇殿し、婦人会長様を芯におつとめさせて頂きました。会員の皆さんは中庭において共におつとめをさせて頂きました。記念品には御供入れを頂戴致しました。

等岡支部では前日の記念講演には約四〇〇名、別席者七名、総会は約五七〇名の大勢の参加者の御守護頂きました。皆様方には、本当に御苦労様でした。有難う御座居ました。

(常任委員 内海 安子)



## 心新たに

福満分教会 福島 時子

四月十九日、五万七千余人の会員が参集し、第八十八回の婦人会総会が開催された。

婦人会長様のお言葉では、本年も昨年同様に成人目標を掲げられ、道の台としての成人の歩みを進める重要性を説かれた。

次に真柱様は、お言葉の中に、今年一年は年祭の年として、次への出発点の土台となる有意義な年となる様にしたい。又、道の婦人として育てることに力を入れてもらいたいと望まれ、女性の徳分や特性から育てるといふ役割について語られた。子供の育成こそ、女性に適した使命である。それは、子供が人間の胎内に宿った時から、育て一条の徳分を与えて頂いているからと話された。私は、もうすでに出産からはかけ離れた年令であり、今から胎教など無理な話である。お与え頂いた四人の娘達が各々に、お道に出会えて良かったと、素直に心から思えるように、又その喜びを伝えることができる人に育つ様、親として心を使っていきたい。

又、過去三年千日の活動は、本部から言われるからしているのだという消極的な気持になって仕方なく年祭活動に参加していなかったか、自分を

振り返ることが大切だと話された。私自身、ドキッとするような言葉であつた。道一条でつと

めておられる方々からすれば、私の様に教会の御用の合間に仕事をしておられる方も、

いい加減な毎日を送っていると、お叱りを受けても仕方がないと思つて

いる。しかし、自分としては、できるだけの努力をしているつもりではないが、これも自分なりの解釈かもしれない。今回この様にして、原稿依頼が来たこと自体、今日迄の自分を反省し、その材料を生かして自分に厳しく通りたい。

総会終了後は、委員長が東西北礼拝場に昇殿し、婦人会長様を芯におつとめをつとめた。神殿を埋めつくす人の数に圧倒されたが、これだけの人が一手一つになったら、素晴らしいだろうなと思わずにはいられなかつた。

前後するが、総会前日には記念行事として、私達は東右第一棟四階に於いて、安野嘉彦本部員先生の「ご存命の教祖」の講演を拝聴した。遠く海外から帰参された方々が集まった同時通訳席では、熱心にメモをとる年配の方々の姿に脱帽。私も、ウカウカしてはおれないと、肝に銘じた。



## 真柱様のお話をきいて

母親になって初めての婦人会総会でした。今までは「まだ婦人じゃないし」という気持で参加していたように思います。真柱様のお言葉の中に、胎教のお話がありました。私はそのお話を聴きながら、自分の妊娠中を振り返りました。子どもを授かつた喜びを味わい、だんだん大きくなつていくお腹にむかつて「優しい、心豊かな子になつてね。」と願っていました。「心豊かな子を産みたければ、自分が心豊かに暮らさなければいけない」その言葉に私は、はっとしました。優しい子に願うてはいたけどはたして私自身が人に優しく接し、心豊かにとおっていたかと。自分がしんどいばかりに、夫に負担をかけていたのではないかと思ひました。自分の欲ばかりとおしていたように感じます。また子どもを授かつた時は、「心豊かに」を心がけて暮らしていきたいと思ひました。今、育てている子どもに対しては、少し申し訳なかつたと言う気持ちがあります。この子に今、私がしてあげられることは何か考えました。今からでも私が「心豊かに」を実践しても遅くはないのではないかと思ひます。泣きやまなかつたりすると

「なんで？」と嫌な気持ちに心が広がります。これからはふーっと一呼吸おいて自分が落ちついて心にゆとりを作りおらかな気持ちで接しようと考えています。その思いは子どもにそして親神様にも伝わることを願っています。子どもを健康に産むことができ親神様の素晴らしいご守護に日々感謝しています。これからも親神様、教祖にはもちろんのこと、私の周りの人々に感謝の気持ちを忘れず、通らさせていただきますと思ひます。そして、私のこの信仰を夫、子どもへとつなげていきたいと思ひます。





# 笠岡学生おちばがえり

## 「十三峠を歩く」

十三峠を歩くことになった。女子青年の「こんな様に続く会」に続いて行きたかったのではない。夏の学生生徒修養会で若い人達が嬉々として歩くからでもない。

いつかは参加したいと思っていたながら、なかなかチャンスに恵まれず実現できなかったのだ。したがって私にとって、全く初めての経験である。

「へえー、その年で初めて……でもやめといった方がいいんじゃない」と、ご親切な忠告を下さる方がいるかも知れない。  
「あっそう、暇なんじゃなあ……」と冷笑される方もいるだろう。

しかし、経験してみなければ何も分からないじゃないか。

そう思っているときに大変都合よく、学生担当委員会(略して学担)で『笠岡学生おちばがえり・新入生歓迎会』が企画され、おちばまでの道中、十三峠を歩いて越えるという。

「よし、行くぞ」私は、勇んで参加を表明した。

四月二十二日(土)天気曇り、予想では午後から雨。「傘をさして登れるか？」と、昨年学修で経験したばかりの三男に尋ねたところ「坂道がきついし、すべるから無理」と即座に教えてくれた。

そこで雨合羽、非常食(チョコレート、のど飴)、スポーツドリンク、防寒具などをデイパックに詰め込み使い込んだ登山靴のようなボロ靴を履き、わくわくしながら大教会へと向かった。

ところが、神事所に着くと他の学担係員(推定平均年齢四十六歳以上)はいたって軽装であり、重装備が少し恥ずかしくなった。

しかもおちばで所用があるというM分教会のJ先生(六十三歳)が便乗されることになり、

(おお!これはもしかすると中高年登山ではないか)と心配していると、先生は十三峠をちょっとだけ歩いた後、現地集合の学生を乗せてきたワゴン車でおちばに向かうと言われる。

「先生、歩かんですか?」と、わざと訊ねると、「わしゅう、あんまりいじめな。腰を痛めとん

じゃ」と言いつつも、弁舌は爽やかで、辛口の御意見を車中ずっと聞かせていたのだ。

しかし、この先生の言葉には棘がない。傍から聞けば悪口に聞こえるような内容でも、なぜか笑って和やかに治まってしまうのだ。

それは、恐らく辛口の言葉の裏側にカラリとした優しさと相手に対する思いやりがこもっているからではないかと私は思うのだが……、どうだろうか。

言葉は丁寧で優しいが、その裏に何か意味を含ませているのだろうかと勘繰りたくなる人もいる。あるいは、多くを語らないが、一言の言葉に

ズーンとくる重みを感じる人もいる。

どこが違うのだろうか……。

そんなことを考えながら、愉快なお話に大笑いし、瞬く間に十三峠への出発ポイント、八尾市の高安大教会周辺に着いてしまったのである。

さて大阪からの登り道は、民家が途切れた辺りから急にきつくなる。

「曇りで良かったなあ。天気だったら汗びっしょり



じゃ」と、現地合流した長男と話しながら坂道を登った。

しかし、若者はやはり元気である。ヨレヨレと登る学担のおじさん達を尻目にどンドン高度を稼いで行く。途中、水呑み地蔵尊で休憩。冷たくておいしそうな水が出ているのだが、ポリタンクをたくさん並べた年配の夫婦が熱心に水を汲んでいるので、諦めざるを得なかった。

その上のちよっとした広場では、青いシートを広げてなにもやらお花見のようなものが始まる様子。「いいなあ」と横目で見ながら峠の頂上を目指し、登り始めて約一時間、思ったよりも簡単に到着した。

そこで私は、こかん様の記念碑があった所で息子とツーショットの写真を撮ってもらった。

なぜ撤去されたのか詳しい事情は知らないが、今は簡単な説明文が刻まれた石のミニメントドけがひっそりと設置されていた。

こんなもんかとかや落胆していると、実はここからおちばまでの道のりが長いのだと教えられた。その時、ふと、こかん様のお気持ちを考えてみた。

教祖の思し召しに素直に従われたとお聞かせいたたくが、おちばから竜田川を越え十三峠へと続く長い登り道、娘盛りの若い女性にとって、不安が胸が塞がれそうになったのではないのだろうか

と拝察申し上げるのである。

そして、懐かしい親里・おちばへと逆のコースを楽しく歩いて帰らせていただいている私たちの幸せをしみじみと感じたのである。

さて、翌二十三日には同じ笠岡の理につながる学生たちお互いが良く知り合えるようにという大教会長様の親心をいただき、おちば管内の新入生歓迎会を開催させていただいた。

当日は学生十人、学担係員五人の合計十五人が参加し、例年と趣向を変えて学生たちにより楽しんでもらえるように、大阪の天保山マーケットプレイスにある「なにわ食いしんぼ横丁」まで出かけた。楽しく想い出に残る行事に係員の立場としてはあるが、偶然にも親子で参加させていたいただき大変ありがたく思わせていただいた。

ところで、M分教会のJ先生が誰だか知りたい方は、このエッセイの副題に次の言葉を加えていただければ簡単にお分かりいただくことができます。

「十三峠を歩く」の「十三」と「峠」の間に「」を打ち「ちよっとだけ」を挿入してください。

「十三、ちよっとだけ峠を歩く」

ほら、そのときの様子がありませんと目に浮かんできませんか。

(学生担当委員 香取雅人)

## ・原・稿・募・集・

### 内 容

①小随筆、②教会・布教所の独自の活動の紹介、  
③俳句・和歌・川柳、④教会行事開催後の報告記事等々

### 字 数

1000字前後(800字~1200字)  
題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。  
俳句等は1句からでも結構です。

### 寄 稿 先

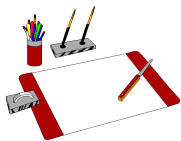
下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：[tenkasa@kcv.ne.jp](mailto:tenkasa@kcv.ne.jp)

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。





四月二十六日

## 登殿参拜感想文

鶴眞分教会 寺下 宏 一

鶴眞分教会、故の二代会長難波猪八郎先生にお手紙差し上げます。

今年、例年になく、別席場前のしだれ桜が、真柱邸の桜より、早く散ったようで、教祖誕生祭には、もう葉っぱばかりになってしまいました。十九日の婦人会総会も晴天に恵まれ、盛大につもめられました。又二十六日の月次祭には、私としましては、教会をあずからして頂いて、三年四月、始めての登殿参拜を御許し頂きました。

ふり返えれば、二十五才で入信をして、鶴山分教会中島宇一先生、鶴眞分教会初代難波一男先生、のおしこみに續き、難波猪八郎先生の指導のもと、今日の日を向えさせて頂き、有難う御座居ました。三十五才より布教所をお預りしてから、五度目の年祭でありながら、つつい事情働きののがれてしまい、七十の坂を越してから、やっと神様に少

し近かよらせて頂く事が出来ました事を喜ろばせて頂いております。

猪八郎先生には、おそらく四度は登殿参拜をなされた事と、思わせて頂きます。まことに御苦労様でした。当日は、大教会より二十名の皆様と、大教会長様をまんなかに、先づは記念撮影、大教会のマイクロで本部に到着、千名以上もの、おつとめ着の人達にかこまれて圧倒されながら、西礼拜場結界内の、タイコを目前に着座、祭典が始まる。

献饌の種類に感心をしながら、真柱様の着座に續いて、かんろ台づとめ、かぐらづとめ、を「目にしたい」と思うがそれもかなわず、結界内ですとめを、拜さして頂いたことをつくづく有難く思っただいです。真柱様の後ろ姿を見ながら、よろづ八首から十二下り迄、唱和させて頂きました。もったいない思いでした。

つづいて松井石根いね本部員の神殿講話、よふぼくがいつも心に、たたえる心として「天理王命」と唱えて、毎朝、毎晩神様の大神に、御礼申し上げますのが、われわれの最も大切なことであると強調「親神様の御前で、早朝ぬかづく、これが一日の暮らしの芯となるように」又「欲を離れる」のやで、「人を救けるのやで」と、又「全教一斉ひのきしんデー」について、親神様に、生かされてゐ

る喜びを、態度に表し、勇んで行動にうつして頂きたいと、むすばれました。

本部よりの、おさがりの品々を頂戴し、帰りの車の中では、次は百三十年祭に、向かって、がんばろうと、勇んだ話して、もち切りでした。

鶴眞二代会長様又御手紙御報告申し上げます。さようなら。いたらぬ点は又おしこみ下さい。用木信者様一同皆様がんばって頂いております。

五月十三日

百二十年祭  
登殿参拜を終えて

坪生分教会 掛 谷 宣 和

年祭毎の登殿参拜、三代会長・父、四代会長・母の姿を見ながら、十年に一度、年祭にはおつとめ着をつけて結界の中で参拜させて頂くということには、私自身重々心得ているつもりでした。がしかし、実際教会長のお許しを頂き、教会を代表して登殿参拜をさせて頂くということは、いかに理の重いことか。更に、その理を教会まで運ばせて頂くという事が私のつとめだとも思わせて頂きました。

三年前、諭達第二号を戴き、年祭活動をスタートし、そして昨年三月、教会長のお許しを頂き、年祭活動仕上げの年、教会長としてつとめさせて

頂きました。しかしその歩みを振り返る時、私自身が親神様、教祖にお喜び頂けるものであったかと省みると、些か申し訳ない遅々とした歩みであつたように思います。そんな私でも百二十年祭当日は、三十四名の信者・未信者の方々と感激の参拝をさせて頂き、そしてこの四月、他の会長様方と共に、結界内でおつとめ着をつけて参拝をさせて頂けたことは、本当に有難い事でした。親神様への拜の後、教祖殿に参進し、真柱様のお手に合わせての教祖への拜の時には感激で一杯でした。

そしてその後、真柱様から年祭を迎える三年千日の歩みの労いのお言葉と、今年一年おちばを賑やかに、更に来年以降次の塚に向かう成人の歩みとして「それぞれが預かる教会が陽気あふれる勇んだ教会に御守護頂けるようつとめて頂きたい。」との意のお言葉を頂きました。教祖百二十年祭のこの理を戴き、旬々に頂くおやの声を頼りに、思いに込めさせて頂くよう、まじめにこつこつとつとめさせて頂くところに、勇んだ教会へと守護頂ける種があると思わせて頂きました。とにかく今年一年、百二十年祭の年、おちばを賑やかにと仰せ頂く声に、なんでも込めさせて頂かねばと誓わせて頂いた先般の登殿参拝でした。ありがとうございました。

## 【9】ひと回り大きく育てほしい

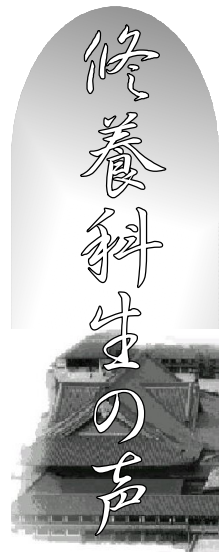


金米糖を口にほうりこむ。まるやかな甘味が広がる。次第に角が溶けてまん丸く……。「この金米糖のように、おまえも角を取って、まあいい心になるんだよ」。

なるほど。でも、小さくなってしまいました。もっと大きな丸にできないでしょうか。人生の節々に逃げずに正面から対する。人格が形成される。それらが角と角の間を一つひとつ埋めていく。越えた節が多いほど大きなきれいな丸になる。角とは我でもあります、その人だけの大切な個性でもあります。こんな子供の育て方はできないでしょうか。

天理教ホームページより

<http://www.tenrikyo.or.jp/ja/top.html>



### 私の二回目の修養科生活物語

甲井分教会 為平 寛

私は昭和三十八年に前会長様に、高校卒業して就職する前に、奈良県天理市の天理教修養科に行つて来いと言われて修養科に入りました。あの時代、修養科は人数は五十数人で三・四・五月の三ヶ月間は毎日が無我夢中の修養科生活でした。修養科が了つて、ふるさとに帰つて運送会社に就職して三十八年間長距離トラックに乗りましたが、五十才後半には身上が出て、会社定年前には体の中の腎臓の中に特大な胆石が出来たり、又、前立腺肥大症にもなり、六十才には膀胱癌になりました。この様な身上は全て、妻がおさづけを取り次いでくれ、親神様、教祖のおはたらきを頂いてたすけて頂きました。

六十才になった今年、会長様から二回目の修養科へ行って、おてふりを習つて来いと言われました。妻には、三十八年間長距離運転手をして、人様に迷惑をかけることもなく無事に終わったお礼

と、身上が大難が小難になったお礼を、その為に、親神様、教祖一条心で修養しようと頭を丸坊主にして笠岡詰所に二月二十五日に来ました。七九期の修養科に入る同期の方々を見ますと、世の中のことなら隅々までよく知っているような、一筋縄ではいかない様な因縁のある方々を見て、ビツクリしました。この日から体が興奮して十日間位は睡眠不足になりましたが、その後、同期の方々には私の身上、前立腺肥大症でおさづけを取り次いでもらったり、又、その他いろいろとお世話になって体も回復して修養生活が始まりました。

三月三日からは学校生活も始まり、修養科は全国、北は北海道、南は沖縄まで修養科生が集まり、話をしたり聞いたりして楽しくやっています。感話には二回ありましたが、二回とも緊張して自分の感話が思うように話せませんでした。笠岡の二人の脳梗塞の人の回復が日に日に良くなる姿にはビックリします。福山から来た脳梗塞の人は、朝は機嫌よく集団登校して行きますが、昼になると、俺は帰ると言って福山から来た付添さんをこまらせます。

学校生活もいろいろありますが、詰所で、感話、大教会月次祭遙拝まなび、祭儀式など経験させてもらい、これから先の人生を陽気に勇んでくられます。

最後に修養科に来させて頂いて大変良かったです。教養の先生方がとうございませう。

## 泣いた顔より笑った顔

葦沼分教会 井上典子

私が修養科に来させて頂いた理由は、会長様の薦めにより、また大きな身上を頂いたので修養に来させて頂きました。私は修養科に来る前は、神様の事は全く考えていませんでした。

両親がいて当たり前だと思っただけで自分ですごく甘えていました。毎日、泣くハンカチが手放せなくて大変でした。感謝の気持ちもなかなか行動に表せませんでした。

修養科が始まって一ヶ月目は、教養の先生が「時は神なり」と言って五分前行動をしなさいと言っていました。私はいつもみんなを待たせてすごく迷惑をかけた。教養の先生にもすごく迷惑をかけました。

朝、起きるのも辛くてもう修養生活を辞めて帰りたいという日が何日もありました。

た。食事の時間も不足を言っただけ嫌いなしてみんなに合わ

せて食べる事が出来ませんでした。でも二ヶ月目になって教養の先生から何でも喜んで食べなさいと言われて、今では喜んで食べられるようになったのです。嬉しです。



二ヶ月目になって、両親にお金を出してもらって修養科に来ているのに、両親のありがたみが解っていない、心がいつもフワフワしている、神様の事が全く頭の中に入っていない、こんな事なら修養科を辞めて帰りなさい。今度は自分で働いて修養料費用を貯めて来なさい。と、きつく言われたときは、すごく辛くて涙が出ました。

神様の事を一番に考えて行動しないといけないと思いました。三ヶ月目は、今までの悪い自分を反省して何でも感謝して一手一つになるように努力をしています。

毎日、朝起きて目が覚めるのも、親神様がお働き下さっているのも、いつも親神様に感謝して通らせて頂きたいと思えます。私は、沢山の身上を見せて頂いたから、おさづけをしっかり取り次いでもらって神様にもたれます。そして地元に戻っても病気で病んでいる人を見たら、おさづけを取り次がさせて頂きたいと思えます。

あと、残りわずかな修養生活を決められた時間にひのきしんをさせて頂くのではなくて、自分で時間を見つけて、少しでも沢山のひのきしんをさせて頂いてもらい、種をしっかりと

蒔いて神様の心を  
つかんで帰りたい  
と思います。



# 私の修養科

福山分教会 岡崎豊彦

私は、信仰のない家庭に育っていて、神様の存在を、信じていませんでした。

しかし、妻との結婚で、天理教のお話を、聞いて、親神様の存在を知り、その教えに深く感銘をうけ、別席を運ばせていただき、細々と理の教会につながっていました。

四十三才に心筋梗塞になり命がない所を、不思議にご守護をいただき助けられました。それから五十才、五十三才と又、心筋梗塞になり、それも助けられ、いろいろと思索していた五十五才の時、心不全になりこれを機会に、会社を退社して教会とのつながりを少しずつ太くするようにしていました。

教会長から夫婦一緒での修養科をすすめられていたのですが、妻のせいにして返事をのぼしていた一昨年、今度は妻が車にはねられて四ヶ月の入院生活を送る事になりましたが頭をうたずに骨折だけですのでほとんど完治しています。妻と一緒に修養科を話し合ったのですが、一足先に私だけ七七九期生、約三百七十名の一人として、修養科に来ることになりました。

修養科は、年齢、キャリア、性格、健康状態等、

それぞれ違ういろいろな人がいます。その人達と出会い、その人達を通して考え学ぶことが出来、人生観もかわりました。教理の勉強もおちばでのひのきしんもみんなと一緒に楽しく送らせていただきました。

詰所生活は、修養科生十二名、男八名、女四名で、四時三十分起床、五時から食堂ひのきしん、六時朝づとめ、六時三十分朝食、後かたづけ、七時五十分朝礼、学校に出発、三時頃帰り、四時三十分食堂ひのきしん、五時三十分夕

食、六時三十分夕づとめ、ひきつづいて八時三十分迄修練を行い就寝は十時頃です。この他に、トイレ、風呂掃除、ふとん干しのひのきしんを時々します。

この毎日のくり返して、福山にて予想していた時間の使い方がかなり違い、最初は不足な気持ち一杯でした。でも教会からの暖い励しの手紙をいただき、自分の思い違いに気付いて、神様を心にしっかりと治め、ひのきしん出来る喜びを心から御礼を申し上げ、「ちばの理」を一杯いただいて福山に帰り、教会の御用に使用していただきたいと思えます。

又、私は癖、性分が強く理屈っぽい

人間なので、これを少しでも取除くように残された三週間を勤めてゆきたいと思えます。教養掛の先生から示された目標、「時は神なり」「鏡屋敷」「報恩」「一手一つ」をもう一度自分で考えて理解して心におさめたいと思えます。

私は、神様の「言わん、言えんの理」を聞き分けるのは、無理なので教会から言われたこと、たのまれたことはすなおな心で勇んで通りたいと思えます。



東悠分教会 田林美智子

古梅園 五十年ふりに尋ね行き

墨を求めて夕満たさる

ふる里の 酒くみかわし 桜花のもと

同窓会の ひと日青春

年ふりて川の流れにうつし見る

布教に立ちし 桜花の季節を

桜を愛で また桜を愛で 古稀歩む

感謝の 日々に また感謝なる

## 四月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理主命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様の深く広く暖かい親心によります御守護と成人へのお導きのまに／＼日々は結構に恙なくお連れ通り頂いている中に今は春爛漫の旬を迎え野山には色とりどりの花が咲き誇り光も水も風もやさしさに満ち溢れ又十六日にははえでづとめが十八日には二百八回目の教祖御誕生祭が執り行われる等喜びを心一杯味わわせて頂いております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共は感謝の心一筋に日々は朝夕に御礼申し上げつつ御恩報じを思い念じ陽気ぐらし建設の用木としての自覚を高めてたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております その中にも今日の吉日は本来の日取りに日を改めてお許し下さいました四月の月次祭を執り行う日柄でございますので只今からおつとめ奉仕者一同心も新たに明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめさせて頂きます御前には教祖御誕生祭や婦人会総会の帰参から帰ったばかりの子供達が疲れも見せず今日の日を楽しみに寄り集い相共にお歌を唱和し尚も親心にお縋りする状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて四月の祭典を今日のこの日に初めてつとめさせて頂くに当りおちばより世話人島村廣義先生にお越し頂いておりますので後程旬に当たってのおちばの思いをお聞かせ頂いて次の塚に向かって新たな成人の歩みを進める上での指針とさせて頂く所存でございます

又今世上では携帯電話やロボット等技術の面での進歩は目を見張るものがありますそしてそれに伴って人間を取り巻く環境も著しく変化しております しかし心の面は置き去りにされてるが為に苦しみに喘ぐ人は弥増しているように思われます 私共は時の変化に惑わされず変わってはならない誠真実の心をしっかり見据えてにをいかけおたすけを通して一人でも多くの人に伝えると共にこれからの道を担う若い世代の丹精にも繋げて行く所存でございます

更には又二十九日の全教一斉ひのきしんデーには全よふばくに声掛けすることはもちろんお互い未信の人も誘い合わせて参加させて頂きます

何卒親神様には時の流れに身を委ねつつも親孝心一筋の心は流される事なく誠を尽くす皆の真実の心をお受取

## 大教会だより

## 辞令

立教168年4月21日付

## ◎登用

承事 中島 誠治

岡崎 真一

岡崎 輝彦

準承事 吉岡 誠一郎

## ◎教会指令

## ◎任命願

神邊 分教会

\*前任 藤井 昭子

\*新任 小坂 静宏

☆奉告祭 立教168年6月4日

立教168年4月26日承認

## ◎登殿参拝(三月)

福山 田中隆之

海松ヶ岡 森本忠善

明石市 杉原博之

東城 横山逸郎

服部 福田勝

島中 内海安子

◎登殿参拝(四月)

坪生	神昭	驛家	皆部	新山邑	ひんざと	陽備	弥高山	鶴山	高屋	作備	神村	福節	福南	福東	福昭	西村	福岩	福満	福芦	福廣	廣町	湯田原	油木
掛谷宣和	渡邊隆夫	高山森雄	河原節喜	三島涉	浅野和芳	虫明好美	岡崎和夫	中島誠治	武内正美	三宅俊正	下田誠輝	藤井治喜	掛谷和由	藤井宣人	平盛秀年	藤本イツエ	三阪泰人	福島大介	竹本和道	佐々木滋郎	宮本泰徳	高木昭祥	中村邦義

◎教会長資格検定講習会修了者

川島郷	鶴真	鶴南	東水島	大恵山	稲倉	真金	御野	深安
香取雅人	寺下宏一	酒本嘉子	藤本芳久	瀬藤教雄	北川治史	猪原啓文	佐藤主計	北村立人

前期 立教168年5月14日終講

◎本部食堂ひのきしん

福廣	福廣	芦常	稲倉	稲倉	福倉
佐々木進	佐々木照江	原登志子	北川真由美	北川真由美	JULIA MIYORI KITAGAWA

自 立教168年4月1日  
至 立教168年4月13日  
多古浦 余村 修

討報

佐藤昌平氏

呉福分教会長

三月二十三日出直されました。  
享年 七十八才



プロは違うぞ! 「こ」が違う!



過日「陽気暮らし講座」の開催をした時の事。前日に遠方よりお越し頂く先生と演芸の歌手、ご苦労なことです。お迎えの空港で歌手のU子さんが見当たらず・・・やがてトイレから出現? 聞くと体調悪く「黄色のシャワー」とか?

ホテルに着くまでの十五分も気が気では無いのです。聞くと「昨夜から下痢で今朝空港まで息子のワゴンで寝てきたのよ」だって。色気もシヤシヤも無いこと・・・。

一方の講師のMK先生はJRで出雲市駅へ、交通事情で遅れた私に憤慨して居られた。夕食に「すき焼き定食」でご機嫌をなだめて聞くと、「その電車の乗客が米子駅で半数以上降りて松江ではほとんど降りた。やがてヒーターが効かなくなり寒さに凍えんばかりの足先が悪い予感を感じた」と、寒さの中私の遅れも輪をか

けて怒り心頭との事でした。

歌手の先生は夕食を抜きとか？  
こちらに悪い予感が走った！翌朝「おかゆ」を進めたが「もう自分で済ませたのよ」だって。もう俺は知らんぞ！

一方講師の先生は上等の話を1時間、さすがの技術は健在でした。後の演芸が気掛かりで控え室を覗いたら「ジャーン」ステージ衣装のU子演歌歌手が準備完了状態です。体調は良く成りましたか？「良くは無けれど、お待ち下さる皆さんに、せて衣装だけでも見て頂くのよ」と満面の営業微笑で答えられた。エライ！あなたはエライと口走った私・

さて、もたつく私の音響操作をたしなめて始まった歌謡ショーのステージ。笑顔で声をはりあげ歌うU子さんはテレビの画面のようです。約三十人を演歌の世界へ引き込んで歌う一時間！彼女はプロ中のプロ！と涙が出てきた。

次の会場への移動中も静かに休息を決め込んでいる。控え室から「バ

タン！」トイレの戸が鳴ります。ああまだ続いているのか・この会場でも楽しむかのように歌ってくれた・辛いだろうな、いたわってくれる身内がいれば別だが・知らない土地で・三日間予定会場全部公演された。その「意気込み」が違うのです。

一日後にお礼の電話頂いた「お蔭様で無事に長崎の自宅に帰りまして」これがプロ、お道のプロである。私にはこんな強さは無い、きつと言いつくして、体調を理由にドロロン。実は親神様からお手入れ戴いたのは私の方だな・きつと。何事からも逃げないよう、あきらめないようやり切る事が道だと。そう教えてくれたU子さんは本部布教二課所属の先生とか、へえへえ・ありがとございました。(ひ)

一年の計は元旦にあり  
こうして、数十年生きてきて、元旦の計算が合った試しがない。  
それは、発想の貧困さからくるも

のではなく、正に、「思い通りにならない人生」の結実である。

とは言え、小中時代は、決まって八月末日には泣いていた。

七月中に宿題を遣り終えた友人を尻目に、蟬と戯れたキリギリスの哀れな末路であった。

三つ子の魂は、——健在である。

過去、幾度の教祖年祭を過ごして、少しく成人の歩みを進めてきたかも知れぬが、この度は、大いに足が前に出たように思える。

目に見えぬを、やに手を引かれ、自ずと足が前に出たのではあるが、しかし、よく物思った三年千日でもあった。

年祭前から始まった百万軒に、千々に心を砕き、心言行が剥がれぬよう、心して歩んだ、……。

そして迎えた年祭は——旺盛なたすけ心からなる感激ではなく、安らかなというか、穏やかなというか、物静かな風の湖面のような心持ちで迎えさせていただいた。

悲しみや、怒りや、心を奪う様々

な出来事に打ち拉<sup>ひ</sup>がれて、いやまだ、それでも、と心に鞭打った、直向<sup>ひたむ</sup>きな三年千日の証かとも思う。

「大難は小難に……勿体ない限り」と祭文に奏上はしていても、その真意に至ってはいなかったが、この年祭を過ごして、少し、その親心に近付いた。

「いんねんなら通らにゃならん」と仰せいただく親心、「成って来るのが天の理」と仰せいただく親心、「不徳の致す処」と謙虚に承ける子心……。

頑<sup>かたく</sup>々なところ<sup>が</sup>自ずと解<sup>ほ</sup>れ、スツと胸に収まった。

前の年祭で「実の親」を失ったお陰か、「実のをや」が身近に感ぜられた。

私の人生は「マルムシ」である。  
突かれれば丸くなり、突き当たれば右に曲がる。また突き当たれば左に曲がり、ひたすら足を前に出す。  
もう、キリギリスの悲劇はゴメンだ。(お)